

世界はグレー一色だった。地上を覆う土も灰色、そこかしこに立つ岩も黒ずんだ色、ドームのように上にかぶさる空も雷雲が近づく時の色をしていた。

いつとは知らないはるかな昔、この地上には『人間』というものがいたという。彼らは火を使うことを学び、たくさん

の町や都市をつくり、海をわたり、空を飛んだ。朝になると、彼らが忙しく動きまわるさまが見られ、夜になると光り輝く灯りが灯され星全体がきらめいた。

でも、それももう昔のことだ。人間達はかつてないほど強く燃えさかる火をつくりあげ、この星を焼きつくし、自分達も滅んでしまった。

人間だけではない。あらゆる動物達、植物達、海にすむ魚達、空飛ぶ鳥達もみんな死んでしまった。なぜなら、人間がつくりあげた『火』には目に見えない恐ろしい毒があり、それが地上にまきちらされてしまったためだ。毒は長い長い間、地上にとどまった。

土にも空気にも水にもとけこみ、それらをみな毒の色である灰色にそめてしまった。風が吹き、太陽が照り、雨が降った。けれど、灰色の世界はびくともしないようだった。

そんなある日のことだ。黒い土に何か一点変わったものが見えた。小さく小さく頼りなげに顔をだしているもの——それは緑色をした芽だ。そこだけ、パツと光がさしこんだように小さな芽は輝いて見える。

それから毎日、芽はグングン大きくなった。緑の葉っぱはつややかに輝き、大きく開いて、厚い雲の間を通してやってくる太陽の光を受けとめた。

この芽がすこやかに成長してゆくさまをみて、太陽や風は驚いたかもしれない。

——この坊やは本当に生きのびることができるとかしら？とね。

でも、芽は成長しつづけ、枝を広げ、緑の葉をしげらせた。天に向かって伸びた枝からは幾百、幾千の葉がさやさやと風に鳴った——それはブナの木だったんだ。

ブナの木はあたりを見まわし、自分以外命を持っているものなどいないことを知った。どこまでも、グレーの世界が広がりに、しんとした静けさがあった。

——僕の仲間達は、どこにいるんだらう？

だが、木なんて一本も立っていない。ブナの木は途方に暮れ、悲しんだ。彼は長い年月土中にいたのだ。ずっと昔、眠りについた種が何かのきっかけで（それは奇跡とっていいかもしれない）目覚めたのが彼だった。

ブナの木は土の中で眠っていた時、父母から昔の地球の記憶をゆずり受けていた。緑がおいしげり、海は青く光り、動物も鳥も魚もみんないた地球。自分達がいた森の中——そこではあたたかな木漏れ日がさし、風はやわらかく吹いていた。

ところが、これはどうしたというのだらう？ 黒ずんだ岩だらけの土地が広がり、太陽は雲の間から弱々しい光を投げかけ、時おり冷たい雨がよこぎってゆく。あの美しかった森は、草原は、川はどこへ行ってしまったのだらう。

それでも、この星にも昼と夜がある。太陽が沈むと、月のぼり、ずっと上の夜空で星がまたたいた。夜になると、ブナの木も眠りについたが、その時必ずとっていいほど、平和で美しかった地球の夢を見た。

ビロードのような苔がつづく森の奥、木々から発する香気があたりに馥郁と香り、紫や青や白の花がつつましやかに咲いている。動物達もやって来た。鹿は長い角をかまえて、ゆっくりと木の実をついばみ、鳥は梢にとまって休み、遠い国の話をしてくれたし、蝶や虫達も森の住人だった。

それらの記憶は、優しい揺りかごのようにブナの木を慰め、力づけてくれるのだった。

やがて何十年、いや何百年もの時が過ぎた。ブナの木は今や、一本の巨大な樹木に成長していた。だが、周囲の灰色の世界は変わらない。人間達がまき散らした毒は、まだ土や空気中にしみ込んでいるのかもしれない。

けれど、ブナの木はそうした風景になれっこになっていた。自分がひとりぼっちで話相手もないことに。変わりなく過ぎてゆく日々——不思議なことが起こったのは、本当に突然のことだった。

その日、いつものようにブナの木は枝を大きくはり、緑の葉を風にそよがせながら立ちつくしていた。黒い土と岩に覆われた風景はずっと地平線までつづき、あたりには生命の兆しのあるものなんて何も無い。まっすぐ前を見て立っていたブナの木は、地平線の上で何か小さなものが動いているのを

見つけた。

——あれは何だろう？

ブナの木はびっくりして、その方に注意を集中した。動いているものをみるなんて、生まれてはじめてじゃないだろうか？

それが近づいてくるにつれ、ブナの木は驚きはますます大きくなった。今やはっきり見えるようになった茶色の毛をした生き物。ずっと昔、自分達が暮らしていた森の中で見かけた動物によく似ている。

その生き物も驚いたようだった。黒い目を見開いて、耳をピンと立てたまま、まっすぐこちらへ向かってやってくる。

とうとう、ブナの木は根元までやってきた生き物はそこに座った。

「君は、一体誰だい？」

ブナの木は狼狽のあまり、幹をふるわせながら聞いた。無理もない。他の生き物に出会うなんて、まったくはじめてのことだったのだから。

「俺は犬だよ」

その茶色い毛をした生き物は、ブナの木を見あげた。

「あんたは動物じゃないね」

「私はブナの木だ」

ブナの木はせいっぱい威厳をもって答えた。

「ここには、なんにもないね。土と岩と空しかない。あんたは、ず——っと、ここにひとりぼっちでいたのかい？」

「うん、そうさ」

「それはすぐく淋しかっただろうね」

犬は気の毒そうに言った。

「君はどこからきたんだ？」

「俺は、ここからずっと北の方からやって来たんだ。そこだつて、こことそう変わりはしないよ。岩山のふもとを川が流れているだけで、あんたのような姿をした木なんて一本もない」

「そうか……」

ブナの木はがっかりしてしまった。この犬がやってきたところは、ひょっとしたら自分がいつも夢に見ていたような、美しい土地かもしれないと思っていたのだ。

「でも、俺は一人じゃない。同じ仲間が何匹もいるんだ。俺

達は群れをつくって山の洞穴に住み、狩りをして暮らしてるわけさ」

「他にも、君のような生き物がいるのかい？」

「そうだよ。犬達の外にも何種類かの動物がいるんだ」

「仲間がいるのに、どうして君はこんなところに一人でやってきたんだい？」

「自分達が暮らしている所以外の土地も見てみたいと思ったのさ。このグレイの世界はどこまでも続くのか知りたかったしね。俺達の種族の間で語り伝えられてきた伝説のように、この星が緑と水にあふれた美しいものだったなら、どこかにそんな場所が残ってるんじゃないかとも思ったんだ」

「私は、その星の夢を毎晩みていたんだ」

ブナの木はそう言って、夢にあらわれる風景を犬に語りかけてきた。

「ああ……」

犬はため息をついた。

「不思議だ。一度も見たことはないはずなのに、あんたが話してくれる星の風景が目にかんでくるよ。雪をいだいた山や青々とした森林やエメラルドグリーンに輝く海とかね。あんたはひとりぼっちだったかもしれないけれど、美しい宝物を心にしまってたんだね」

そして、犬はまた続けた。

「昔、恐ろしい毒がこの星を覆いつくして、たくさんいた生き物のほとんどがあらかた死んでしまった。でも、俺達はこうして生きている。この星だって死んでないはずさ」

「この星も昔のような美しい姿を取り戻してくれるだろうか？」

ブナの木は思わずつぶやいた。

「うん、そう信じるんだよ。俺は仲間達のところへ戻って、あんたのことを知らせなきゃ。ただ一人生きてきた、大きな木のことをね」

犬はたちあがった。

「行ってしまふのかい？」

自分はまたひとりぼっちで、ずっとこの地に立ちつくしていなければならぬのだらうか——ブナの木は悲しく思っているが聞いた。

「なあに。仲間を連れてまた戻ってくるよ。あんたは俺達に、

気持ちのいい木陰をあたえてくれる。さやさやという心地良い葉ずれの歌もうたってくれる。あんたと俺達で、あんたが話してくれたような、美しい星をまたつくりあげるんだ」

そう言って犬は、ブナの木から葉のしげった枝を一本受けとった。仲間の犬達に、ブナの木が本当に存在することを教えてやるためにね。

「それじゃあ、ブナの木さん、待っていてくれよ」

犬はさっとかけだしていった。その姿は見る間に遠ざかり、小さな点になり、地平線の向こうに消えてしまった。

あとには、ブナの木が一人だけ取り残された。日没があたりをつかの間、赤々と染め、やがて夜のとばりがおきる。影絵のように動かない岩と空——いつもと変わらない荒涼とした世界がひろがっている。

しかし、ブナの木の内部では、喜びが泉からわきでるようにあふれだし、希望の灯が暖かく灯っていた。

「私は、これまでこの世で一つきりの木だった。でも今は違う。一つの星の一本の木なんだ」